

聖書:エペソ人への手紙6章1～4節

説教:子どもたちよ

はじめに

聖書には親子関係の問題が沢山でてきます。前回取り上げたダビデは、イスラエルの王に選ばれるほどのすばらしい信仰者だったのですが、子育てということに関してはとても理想的な父親とは言えない人で、息子どうしで争い国の将来を左右するほどの大問題になったこともありました。

そこまで深刻ではないにしても、子育ての悩みを抱えている親が沢山おり、かくいう私もその一人です。そんな私たちに聖書は何を語っているのか。ともに聴きたいと思います。

1 子どもたちよ

1) 両親に従う

1節。「子どもたちよ。主にあって自分の両親に従いなさい。これは正しいことなのです。」いま子どもの虐待ということで大きな問題が起きる時代です。どんなにひどい親でも反抗してはいけない。従えということなのでしょう。もちろん、そんなはずはない。そんなことをしたら、ますます問題が深刻になるだけです。むしろ、子どものほうこそ親に気きたい疑問です。「どうして子どもは親に従わなければならないのか。」

2) 十戒の命令(申命記5章16節)

子どもからこう質問をされたらどう答えたらよいでしょうか。聖書を信じていない親なら、「子どもは親に従うものと決まっている。」そんなふうに頭ごなしに叱りつけるように言われても、納得するとは思えません。

しかし聖書を信じている私たちはこう答えることができます。2, 3節。「『あなたの父と母を敬え。』これは約束を伴う第一の戒めです。『そうすれば、あなたは幸せになり、その土地であなたの日々は長く続く』という約束です。」ここがかぎ括弧で書いてあるところは申命記5章16節からの引用です。どうして子どもは親に従うのか。二つの理由がある。一つ目。神のことばである聖書にそう書いてあるから。二つ目。もし親に従うならば、あなたの将来は幸せになるから。子どもはこれを聞いてどう思うでしょう。「また聖書の話か」とうんざりするかもしれない。しかし、親は神を信じ聖書をよりどころとしている。納得するかどうかは別としても、そのことは心に残るはずで

子どものことはひとまず置いて、では父親はどうなのでしょう。

2 父たちよ

1) 怒らせてはいけない

4節。「父たちよ。自分の子どもたちを怒らせてはいけません。むしろ、主の教育と訓戒によって育てなさい。」まず前半の「子どもたちを怒らせてはいけません」から考えましょう。いちいち説明するまでもなく、たとえば、子どもを怒らせないように、欲しいものはなんでも与えなさいという意味ではない。ここで問題にしているのは、子どもがどうして怒るのか、その理由です。怒りには正しいものと間違ったものとがある。わがままはで怒るのは正しいことではない。では正しい怒りとは何か。皆さんニュースを見たり聞いたりしていてどんなときに怒るでしょう。たとえば、政治家が裏で法律に反することをしていたり、選挙に勝つために人の道に外れたようなことをしていたとわかったら、だれでも怒るでしょう。それは正しい怒りです。

子どもも同じです。親がもし理屈に合わないことを言って無理矢理従わせようとしても、子どもは混乱して怒ります。それは正しい怒りです。そんなことにならないように、親はきちんと一貫して理屈が通ったことを言わなければならない。

2) 主の教育と訓戒によって

そこで今日の核心になるわけです。いま、常に一貫していくと言いました。親は子どもを育てるときに、どのような基準に従って育てるのかということになる。そこで4節後半に関わってきます。「主の教育と訓戒によって育てなさい。」

世の中には、子育てのノウハウ本が沢山売られています。それはそれなりに有益かもしれませんが、育てる基準は本の数だけあると言っていい。時代によっても変わる。昔は体罰は当然のこととされていたが、今同じことをすると虐待と疑われる可能性がある。それくらい時代によって変わってきた。しかし私たちは「主の教育と訓戒」という一貫した基準に従います。これは時代によって変わらない。ではこれは何か、これが次の問題になります。

3 主にあって

1) 正しい基準

そこで注目したいのは、1節と4節、一番前と一番後ろに「主」ということばがあつて、真ん中を挟み込むようになっているところです。親が子どもを育てるときの基準は主である方、イエス・キリストにあり、そして神である方が語られた聖書のみことばに具体的にそのことが示されている、ということです。パウロが申命記5章16節から引用するのも、聖書に正しい基準が記されているからです。

2) キリストと教会がモデル

しかしどうでしょうか？子育ての基準は全部聖書に書いてあると言われても、ちょっと困るのではないか。世の中の子育て本は、読めばすぐに実践できるように書かれています、聖書は違います。何が正しくて、何が間違いかは書いてあつても、実際の子育てにすぐに応用できるようには書かれていない。そんなときモデルがあつたら一番わかりやすい。では、子育てのモデルはどこにあるのでしょうか。

少し前の箇所ですが、5章24,25節にこうありました。「教会がキリストに従うように、妻もすべてにおいて夫に従いなさい。夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自分を献げられたように、あなたがたも妻を愛しなさい。」キリストと教会の関係をモデルにして、夫婦の関係を考える。そんなふうに書いてありました。親が子どもを育てるのもこれと同じように、キリストと教会の関係をモデルにします。

どのようにしてでしょうか。キリストが父親、子どもが教会。そんなふうな対応を考えてみましょう。キリストは教会を愛し、教会のためにご自分を献げてくださいました。それが父親のモデルです。そうすると父親は子どもを愛し、子どものために自分を献げることになります。

具体的にはどうすることか。たとえば、子どもの意見を聞こうとしないで、とにかく一方的に自分の意見を押しつけるタイプの父親がいます。私の父親がそうでした。それは父なりの愛情の表現だったのでしょうが、そのときは理解できなくて、子どもの私はずいぶん苦しみました。

しかしキリストはどうでしょうか。私たちに何かを押しつけたり、要求したりしません。その代わり、屠り場に引かれて行く羊のように黙って、私たちの罪のために十字架におかかり、ご自分を献げてくださいました。十字架で苦しみながら、ひ

たすらに父なる神がよみがえらせてくださると信じ続けました。そのような姿を通して、十字架にこそ、私たちが寄り頼むべき正しい基準があることを教えてくださいました。このようにしてくださったキリストが、父親のモデルです。もし父親がそのとおりのことができたなら、子どもはどうなりますか。教会が何も言われなくてもキリストに従うように、子どもも親を尊敬し、親に従うようになります。

ところでここに父親は出てきても、母親が出てこないことにお気づきでしょうか。無視しているわけではありません。子どものためにいのちを差し出す覚悟が問われるのは、父親であるからです。

3) 教会と一緒に子どもを育てる

けれどもいまはシングルマザーという方も珍しくなく、最初から父親がいないケースもある。そんな場合はどうしたらよいのでしょうか。またたとえ両親がそろっていても、子育ての問題を抱えて悩むことがある。そのようなとき、どこに助けがあるのでしょうか。もちろん公の相談窓口を利用することもできます。

では教会はどうか。1章23節にこうあったのです。「教会はキリストのからだであり、すべてのものをすべてのもので満たす方が満ちておられるところです。」私はこのことばを、「教会にはなんでもある」と理解しています。子育ての働きもその一つ。いまは、一人で子どもを育てることを「ワンオペ」と言うくらい、大変な時代です。しかし教会はそうではない。教会の皆さんと一緒に子どもを育てていく。キリストが私たちを愛しておられる。そのキリストに従っていく大人たちの信仰を見ながら、子どもたちは学んでいきます。

キリストがご自分のいのちを持って買い取ってくださった教会に私たちは招かれています。私たちは、このキリストに従ってまいります。